

子供の絵の指導について（Ⅱ）

錦 織 恭 一
(絵画製作研究室)

On the Teaching Method of Children's Picture

Kyoichi NISHIKORI

まえがき

子供にのびのびと、いい絵を描かせるためには

- ① 子供をそくばくしている諸要素を除去し、子供の心を解放してやる必要がある。
- ② 絵は再現ではなく、表現であって子供の情感、感動—美しいものへの—に裏打ちされていなければならない。表現は形式ではなく、内容が大切である。
- ③ 概念は打ちくだいて行かねばならない、それには一般的なものから、個のものに突進んで、一般的なものゝの姿と、個の姿との差を発見することから始めなければならない。

以上のことについて、前編で、指導上効果のあった実例を報告したが、本編では、次のような指導例について報告する。

- ① 子供の描画活動には、感動が必要欠くべからざる要

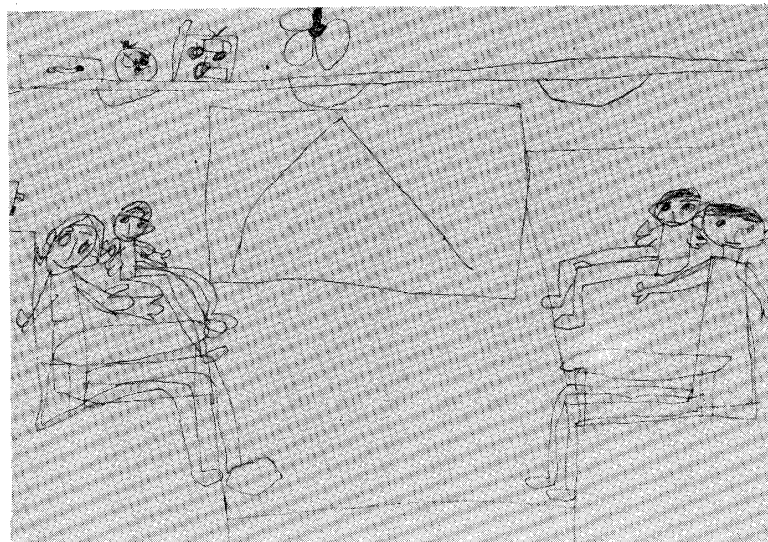
素である。

- ② 子供の描画活動には、適度の抵抗感を与えることがよい。

指導例

子供には個人差があり、比較的スムーズに指導に乗る子供と、頑固に自分の殻にとじこもり、仲々抜け出せない子供と色々である。O君は頑固な方の子供であったが、夏休みあけの絵のときに、いつになくニコニコしながら『今日は萩市へ遊びに行ったことを描くよ』と自分で言い出した。それまでにO君は、7・8枚絵をかいたが、いずれも自分のあそんだことについての絵であって、情感の乏しい、通り一遍のものであった。O君の話を要約すると

一家4人（父・母・自分・弟）で萩市（おばあさんの



O君 7才
萩へ行ったときの
汽車の中

家）へ行った。4人で汽車の一つのボックスに席がとれた。お土産にミカンをもらった。帰りの汽車の中も大変おもしろかった。

以上のような内容である。もう少し突込んで話を聞いた方がよいと思ったが、あまりに描きたがっているのですぐに描くことにした。（O君の絵参照）。まず坐席に1人の人物が出来、向いの坐席にも1人がいた。だがその隣の人物が仲々かけない20分あまりも考えていたが、どうしてもかけない、とうとう私のところへやって来て『隣りに腰掛けていた弟がかけない』と悲しそうな小さな声で言う。そこで色々聞いて、何に困っているか、どこがむずかしいか、聞き出してみると、となりの弟の足が床につかない、床につけるととんでもない長さになる。という。汽車の床を一本の横線で表し、そこに自分達の足がとどかねばおかしい（理論上正しい）と思いつめているらしい。私の手元にあったエジプトの絵を見せて、向うの人は上に描いてもいいよと言ってやったら安心してかき続けて行く。あみ棚の上のふろしきづつみの中のミカンもかき、扇風機もかいた。『うまく出来たね』とほめてやると、まだ終ってはいない、これをかかないと、終りにならないと言いながらかいたのが扇風機のスイッチである。帰りの汽車の中でそのスイッチを何回も入れたり、切ったりして母に注意されている情景が目に見えよう。それにしてもいつも豆つぶ大にしか人物をかかなかったO君が堂々と人物を4人（顔などは概念的）もかいたのは荻へ行った感動が強かったからに外ならない。

あみ棚の他人の荷物、窓の外の風景には、全く興味を示していない。これでいいのである。その後O君の絵はうんと進展したものになった。

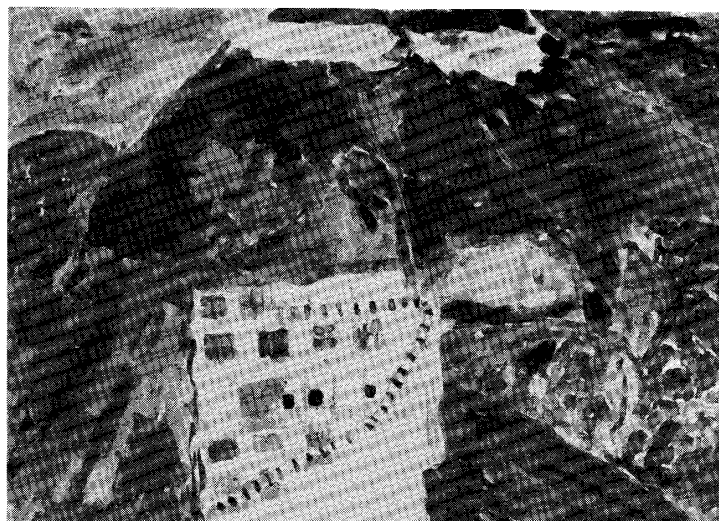
生気のない、仕方なくかいたような、熱のない絵（絵1）をかき続けていたA子が、ある日突然うれしそうな顔をして、もくもくと描き上げた絵が、大山の絵である。生れて初めて大山へ遊びに行き、^{ます}水原のスロープで走り回り、高原ホテルで食事をした、このたのしかった強烈な印象がこのみずみずしい、新鮮な絵をかかせたのである。表現することを支出とするならば、貯蓄が多いかすくないかによって、支出の程度がちがってくるわけで、わずかの貯蓄によってなされる支出は、表現の貧しさをよび、貯蓄がなくなれば固定的な概念画をつくることになる。貯蓄は多い方がよい。おどろきと感動は多ければ多い程、強ければ強い程いいのである。

子供の描画活動に一つの抵抗感をもつような目標（ねらい）を与えることは、そのねらいが緊張感を呼び、その精神の緊張が持続することによって、子供の描画活動を生々したものにするためである。感情は解放させ精神を緊張させるのが指導の要点で、解放の面と緊張の面のバランスは子供の状態によって考えねばならないことである。

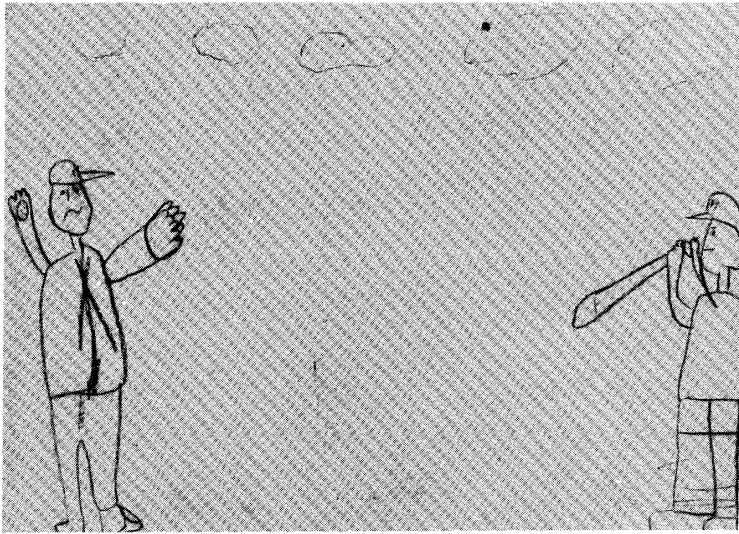
- 今日の絵は30人、と厳粛にS君に言う
- S なんのこと
- 今日は人を30人かくんです
- S ふーん
- どんなことでもいい、何をしているところでもいい
- S よし決った



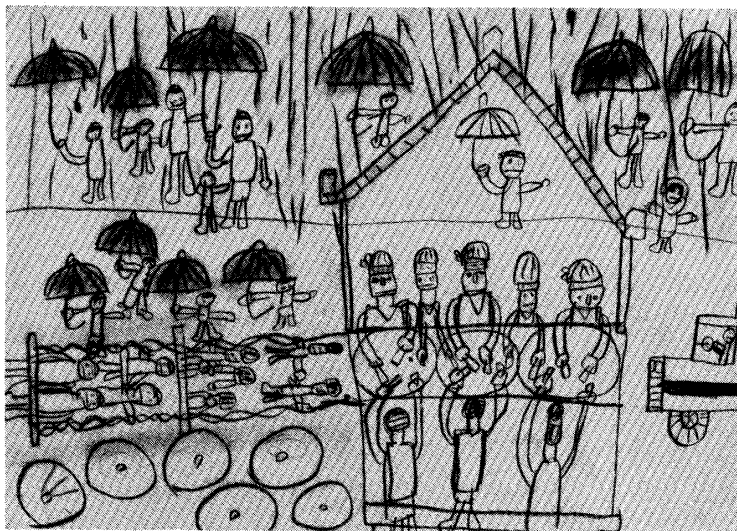
A子7才絵1 猫をだいている人物



A子7才絵2 大山へ行ったこと



S君 8才 あそび
緊張感の乏しさによる
内容の貧しい絵

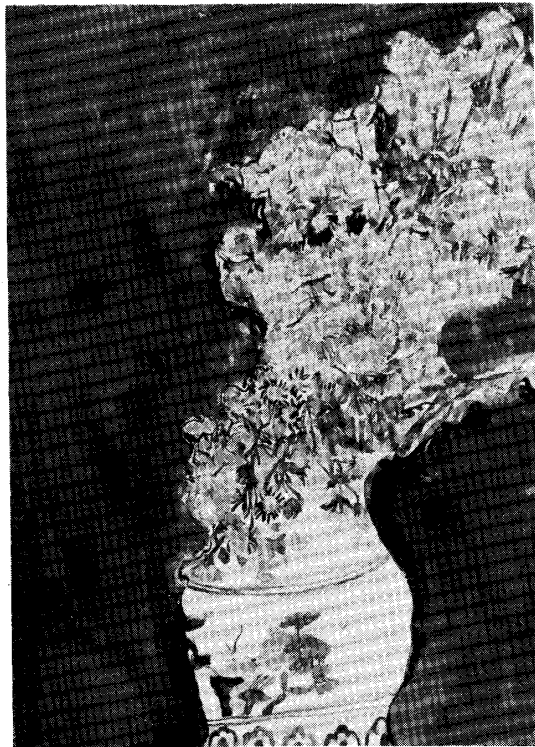


S君 8才
どう行列

このような内容で始めた絵が上の絵で、のびのびした絵が出来たのである。雨降りのどう行列が生々しく表現されている。こういう行事に関する絵は、今までどこでも取扱われているが、その方法は、運動会が行われたあとでは運動会の絵、遠足があればその後で遠足の絵、お祭の月にはお祭の絵をかく、というように、きまりきったこととして何のうたがいてもなく、毎年同じように取扱われて来ている。その結果全国的に運動会・遠足の絵に一つのパターンが出来ており、子供はそれにのり、安易な、精神の弛緩した描画におわり、出来上った作品は、まことに魅力のないありふれた作品が多い。今日のS君は、人物30人という抵抗にしげきされ、今までより充実した絵をかき上げたのである。

あちこちで子供の絵を審査する場合、いつも感ずることは、花をかいた子供の絵にはいい絵が乏しいということである。概念的な絵が多い。もともと子供の好むものは、動くもの、電車、汽車、自動車、耕耘機、飛行機、昆虫等であり静的な花には、比較的関心がうすく、花の名前もあまり数多くは知らないものである。これが普通で、一つの花の美しさをしみじみと味わう子供は、どう考えても不健康な感じがする。——思春期なら別である——。

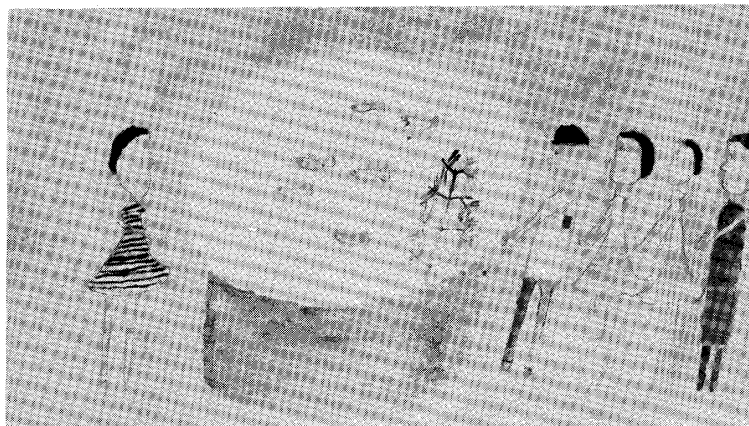
その花をY子の場合あえて取扱ってみた。このときの名題は、これ以上くわしくかけないところまで綿密に描く、というもので、描写が科学的になる危険性もあったが、モデルが花であるということを忘れてしまう程にも綿密にということを強く要求してみた。この非人



Y子 8才 花

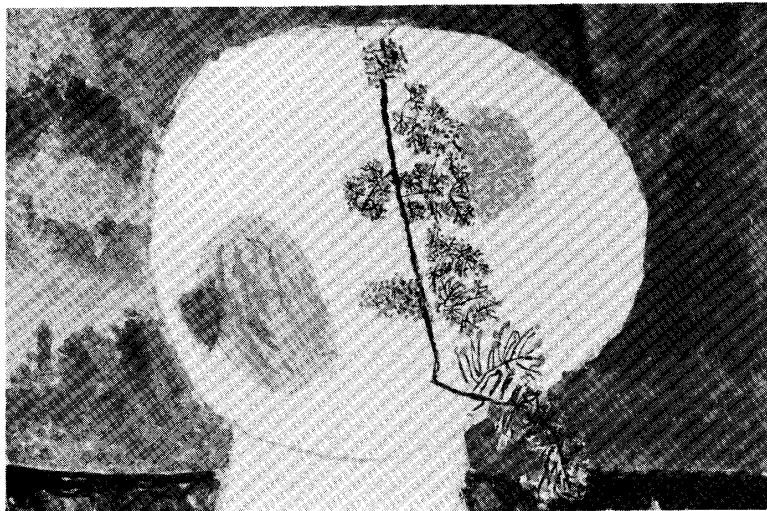
情的な要求が抵抗となり、緊張を呼び、すがすがしい花の絵となり、抵抗をのり越えるための努力が、新しく美しさを生み出したのである。

「好きな画用紙で好きな絵具を選んで、そして自分の好きなかき方で絵を描きなさい」といっただけで、いい絵をかいてくれたら、いうことはないが、そういうことは先ずあり得ない。`眼の前にあるものをその通りかかなくてもいいよ、自分で好きなように形も色もおしておいた方がうんといいいですよ」と言ったところで子供は自分の好きな表現方法など見当もつかず、友達のまねをしてびくびくかくのが精一杯である。好きなようにかかせるには、段階が必要である。その段階の一つとしてあ



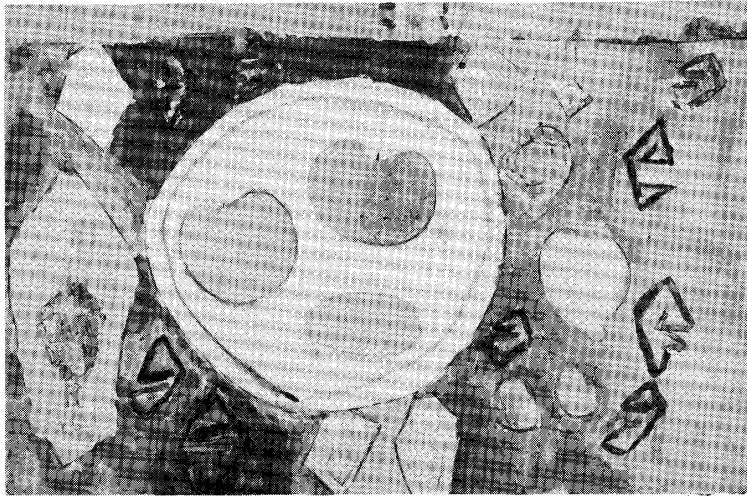
Y子 7才 金魚

動きのない概念的な絵である。Y子は1年半位、この形式をつづけてきた。



Y子 8才

花の後にかけた静物
草の実、ボケの実、共に見方が深まってきた。



M子 8才
布のもように挑戦した絵

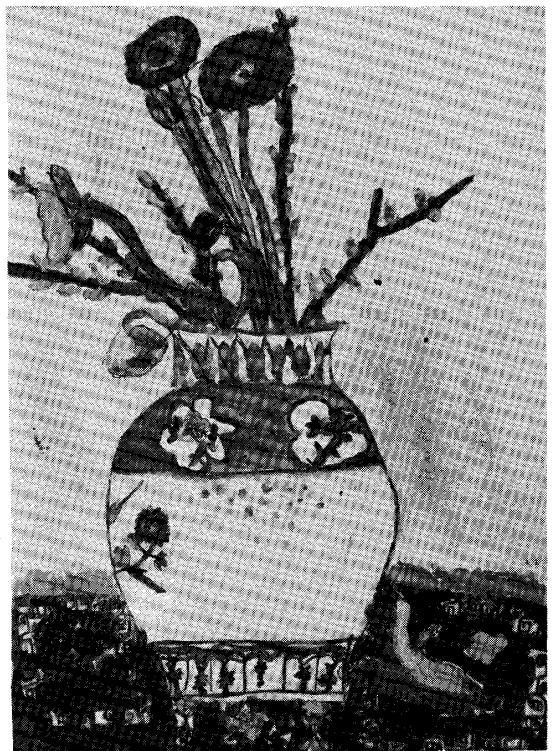
る抵抗を与えたがよい。

香港からもち帰ったテーブルセンターをしきりに『きれいなもよう』とながめているM子に、この布のもようを「出来るだけくわしくかく」と約束して描かせたのが上の絵である。まだ不充分であるが、この絵を描いてから後、長足の進展をみた。

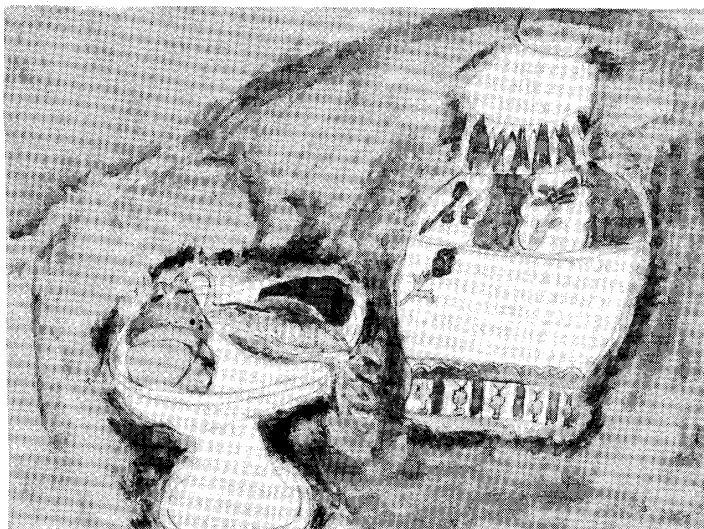
技法に関し注文をつけることも、一つの抵抗である。子供はもともと技法などには無関心で水彩絵具に水を多く加えるか、少なくするか位しか、知っていないものである。水彩絵具はどんな使い方が出来るか、これは幼児（2才—4才）の頃の材料体験で味っていることであるが、それを描画に生かすとなると、別のことに考えるら



M子 7才 概念的な人物



M子 8才 近ごろかいた花の絵



K君 8才 カサカサにかすれた筆づかいをしている



T子 8才 水をだぶつかせて流れるような（バック）をしている。

しい。

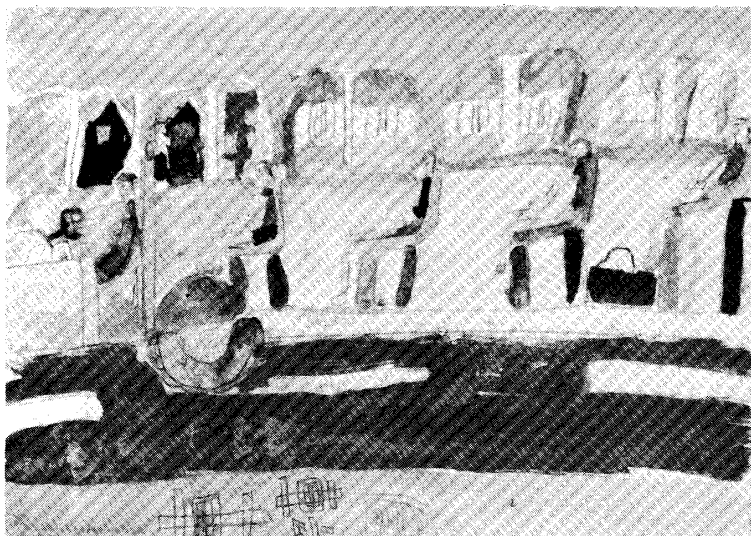
「今までに自分でしたことのない絵の具の使い方、筆のつかい方を必ず一つ使うこと、この約束にもとづいて出来たのが上の絵2点である。

描く順序をいつもかきなれている順序と全く逆にする。これも抵抗であって、効果がある。

- いつも頭から描いていたものなら、足から
- 左からいつもかいていたなら、右から
- 外形 → 窓 → 人物であれば、その逆に

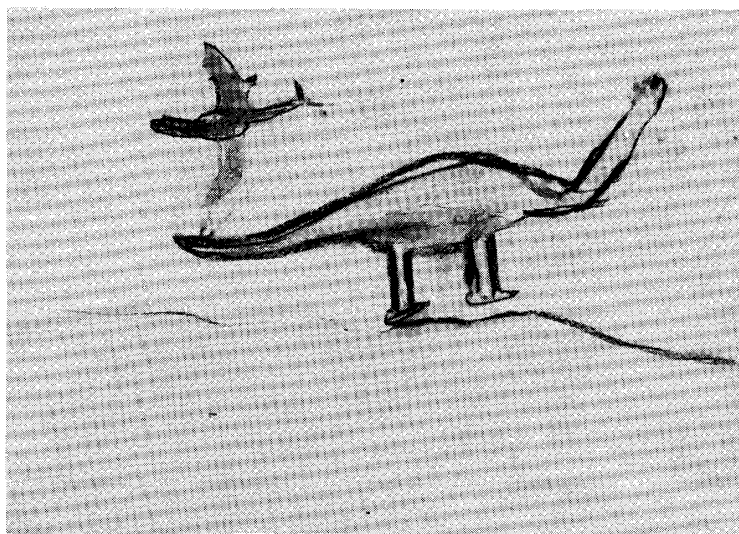
逆順を目標として出来たのが、下の絵である。

見なれたものは絵になりにくいものである。勿論私もそのことを常に体験している一人であるが、子供はより一層珍らしいもの、新しいものにおどろきを示すものである。漁師の子供が、父の労働を絵にすることにあまり興味を示さず、雪をかぶった高い山におどろきの眼をみはり、山奥に住む子供が、くりひろい、きのこがり、柿とり等、山あそびより、漁船、新幹線の列車にあこがれるのは、このことを物語っている。

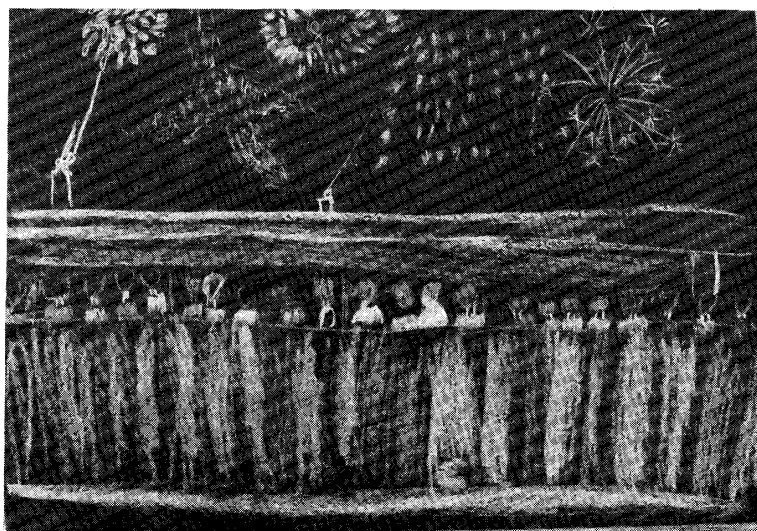


K君 8才

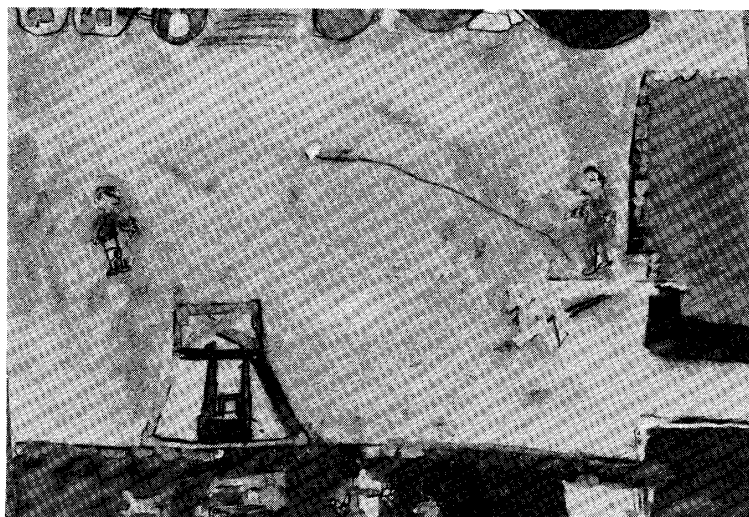
外形（自動車）→ 窓 → 人物
これの逆の順でかいた絵



D君 7才 花火の絵 以前の状態



D君 7才 花火



D君 7才 花火の絵の後でかいた水彩

同様に新しい材料についても、好奇の眼をかがやかしてとびついて来るものである。7才の頃から油絵具が使いたく、母にねだっていた子供が、8才の正月にやって買って貰い、その日家でそのセットを拝んでいたという。何を拝んでいたかと、聞けば、
「早く先生のアトリエで絵が始まりますように」と祈ったと言う。これでいいのである。

新しく未経験な材料を与えることは、そう
うな刺激であり、驚くような、結果をもたらすものである。

K君にある日、黒の画用紙と、120色の
パステルを出してやる。15.6分もこれで描くのかとかなんとかいいながら、手にすりつけたり、紙に少しこすりつけたりしていたが、やがて描き始めたのが花火の絵である。色づりでなくて残念だが、左のようなすばらしくきれいな絵をかき上げたのである。

1年4ヶ月間もブルドーザーを描き続け、その後4ヶ月間はロボット、船である。そのT君に80色のコンテを渡し、これで今日は描いてみよう、と言うと、そこらにころがっている果物等を見てかき始めたのである。トウモロコシ、洋ナシ、アケビ等を力強く把握している。

そのT君が私の幻燈機を見て、『先生これは何』と言うから、それはこうして、フィルムを入れて映すんだよという、自分でパリーのフィルムを入れて映し『きれいだ!!きれいだね』という。それを、そのまま描くという約束で出来たのが下の絵である。これが一つの転期になればと願っている。

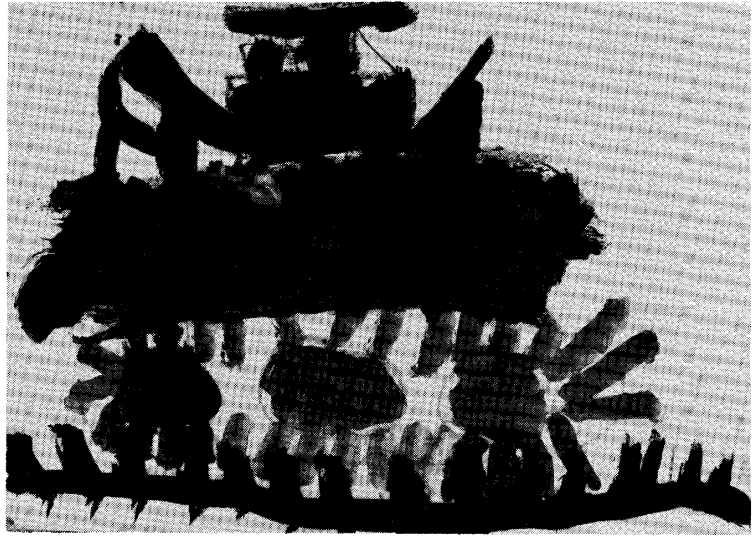
抵抗を与えることが一つの刺激となり、緊張感を呼び、描画にいい結果をもたらすことになるが、とうてい乗り越えることの出来ない、その子供にとって不可能に近い抵抗であっても、子供は始めから手が出ないのである。抵抗は大きい程いいに決っているが、努力すればなんとかのり越えることが出来る、ぎりぎりのものがよい。子供の個人差によってそれぞれ与える抵抗は考えねばならない。

指導者は、子供の日頃の環境や、どんなものにその子供が目を向けているか等をよく知って、常に新しさを求め、子供に先手をうつ必要がある。

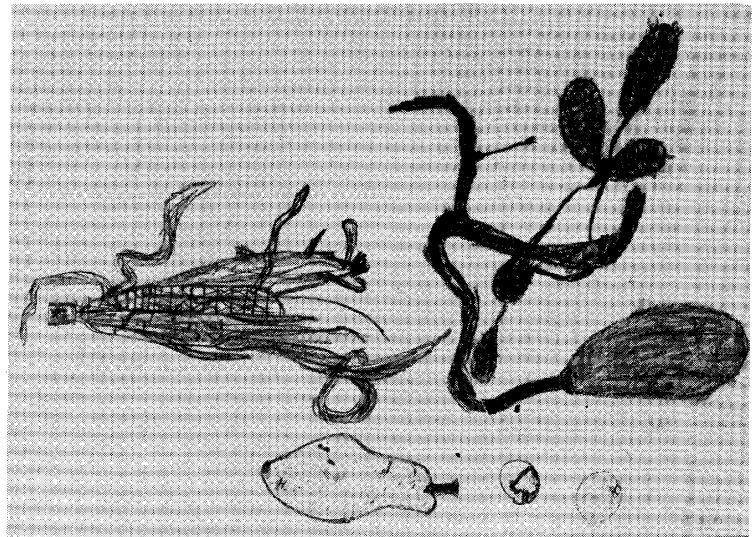
文 献

- 1) 錦織恭一：本誌16 25（昭和53）

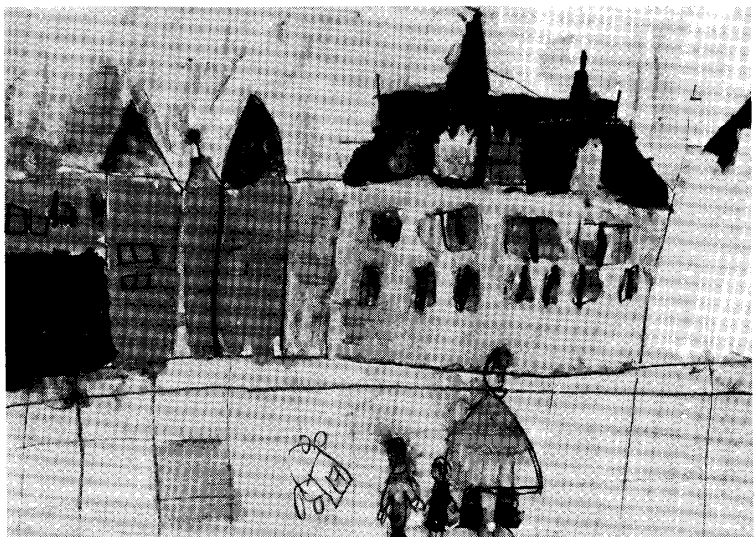
（昭和54年1月22日受理）



T君 6才 1年半もかきつづけたブルドーザー



T君 7才 コンテ 果物



T君 7才 幻燈をみてかいたパリーの絵